

我が国のカヌー競技における普及・発展過程に関する一考察 —レーシング・カヌーを中心として—

栗本宣和・吉田 章・阿部翔子*

A study of the historical promotion process of flat-water canoe racing in Japan

KURIMOTO Nobukazu, YOSHIDA Akira, ABE Shouko*

Abstract

This study aimed to understand the historical promotion process of flat-water canoe racing in Japan. Data collected from previously recorded facts and occurrences as well as archival reports concerning canoe racing were categorized from the viewpoint of event, organization, and equipment, among others. The 1964 Olympic Games in Tokyo provided an important epoch in which the Japanese canoe racing organization was established, and from that time, promotional activities evolved through participants' experiences in international events and the National Games. However, these activities were somewhat weak and confusing.

This study therefore defined seven phases in the development of canoe racing promotion in Japan, which included 1) Pre-introduction period, 2) Primary period, 3) Confusion period, 4) Revival period, 5) Organizational build-up period, 6) Spread and establishment period, and 7) Accelerated enforcement period.

キーワード：レーシングカヌー，スポーツプロモーション，歴史報告，国際競技力

Key words: Canoe racing, Sports promotion, Historical progress report, International competition level

1. はじめに

カヌー^{注1)}やカヤック^{注2)}は、何千年も昔から南方ポリネシアンや北方イヌイットの人々の移動交通手段として、また狩猟の道具として用いられ、そして今日まで発達してきた乗り物である。最も古いカヌーと思われるものは、6,000年くらい前に造られたユーフラテス川近くのシュメール人の王の墓から発見されたものである。スポーツとしての近代カヌーの発祥は、19世紀中頃のイギリスに求めることができる。カヌーが独立した競技

として初めて行われたのは、1866年にイギリスのテムズ川でのレースであった。初回の世界選手権大会は1930年に実施され、1936年の第11回ベルリン大会からオリンピック正式競技となった。日本のカヌー競技は、1940(S.15)年に開催が予定されていた第12回東京オリンピック大会の準備と強化のため、ベルリンオリンピックから艇を持ち帰ったのが始まりであった。それ以来、日本はアジアカヌーの中心として普及に努めてきた。オリンピック大会では、1964(S.39)年の第

* 日本体育大学

Nippon Sport Science University

18回東京大会以来、1980年第22回モスクワ大会（日本不参加）を除き、連続して出場してきている^{15,23)}。

今日、幅広い普及を見られるようになったカヌーについては、数少ない資料（記念誌や国体のプログラム等）ながら、概ね以上のようなとらえ方で整理されている。しかし、それらの普及してきた過程や発展してきた歴史に関して詳細に記したものが存在しない。そこで、本研究はカヌー競技に関する研究の基礎資料として、日本にカヌーが紹介され、国際的に活躍する程になるまでの成長段階を整理し、分散している史実や資料について体系的にまとめることを目的とする。

現在のカヌー競技は、湖沼でのフラットウォーターレーシングカヌー^{注3)}（以下レーシングと称す）、川下りのスラロームとワイルドウォーター、フリースタイルのロデオ、球技のカヌーボロ、セーリングカヌー、ドラゴンカヌー（ボート）、海でのシーカヤックとアウトリガーカヌーに大別される。それらの中でオリンピック種目となっているのは、レーシングとスラロームの2種目である。本研究では、オリンピック種目として最も歴史が古く、また今日のカヌー競技の基盤となり、かつ日本カヌー連盟に登録されている競技者数が最も多いことから、各種のカヌー競技の中でもレーシング種目を対象とした研究を行うものである。

2. 方法

（社）日本カヌー連盟やレーシングカヌーの実績を持つ各大学が所蔵している資料、あるいは周年事業の折に出された記念誌、近代スポーツを歴史的にまとめた書物、新聞記事、及び個人が記した資料等について収集・分析を行った。またカヌーに関する戦前の様子ならびに東京オリンピック当時を知る日本カヌー連盟役員にインタビュー調査をおこなった。そこで集まった断片的な情報を材料とし、時代系列のもとにつなぎ合わせていった。そして互いに関係し合う組織、開催された大会や行事・イベント、それに競技場や道具（艇）などの観点からも項目を整理することにより系統的に考察を進めた。

3. カヌー競技の歴史

オリンピックにおけるカヌーは、1912年の第5

回ストックホルム、1924年の第8回パリの両大会において、デモンストレーション競技として行われた。その後カヌーがオリンピックの正式競技として取り上げられたのは、1936年の第11回ベルリン大会からである。カヌー競技は、開催国であるドイツの希望によって初めて行われ⁹⁾、その後の大会から継続実施されるようになった。我が国におけるカヌースポーツは、この1936（S.11）年が誕生の年となった^{11,25,26)}。そして2008（H.20）年の北京オリンピック大会では、史上最高の5位入賞（種目）を果たした。これらに関して、カヌーが国内においてどのように根付き、普及発展していったのかについて、背景・組織・大会・選手の観点から以下に明らかにする。

1) カヌー艇と競技場の変遷

(1) 競技用カヌー艇の変遷

「オリンピックにおいて1936（S.11）年の第11回ベルリン大会から正式種目になったカヌー競技を視察した中原幹二氏（当時日本漕艇協会役員：東京オリンピック監督）と高木公三郎氏（当時日本漕艇協会顧問）が、カヤック二人乗りとカナディアン一人乗りを持ち帰ったのが、日本の競技カヌー艇の始まりといわれている^{15,25)}。」という記述と、「伯林大会からオリンピック・ゲームに加はったカヌー競技は、（中略）東京オリンピックには是非行はねばならないので、オリンピック調査班でも日本に無い二人漕のカヤックと一人漕のカナディアンを見本として購入し日本漕艇協会に託して準備をしてゐる^{1,26)}。」との記述が今野氏所蔵の昭和11年当時の新聞記事にあり、ベルリン大会を視察した際に日本漕艇協会の役員2人が、カヌー艇を購入して帰ってきたとすることができる。

1937（S.12）年2月当時の新聞記事には、「日本漕艇協会では六日の午後二時から向島帝大艇庫前で東京大会の新種目として従来吾國に無かつたカナダ式カヌー及びカヤック両艇の一般公開を行つた。（中略）両艇が日本の河に浮かんだのはこれが最初で何れもその軽快な姿に好奇の眼が注がれてゐた。（中略）なほ漕艇協会では今後普及性に鑑み當日の新艇を各支部に回覧し設計圖を作成の上廣く一般に配布し、取敢ず今秋の大会に（中略）競漕種目として加へる筈である²⁶⁾。」とあり、カヌーを広く一般に広報するとともに、国産艇製造

に向けてカヌー普及の第一歩に着手したと考えられる。同年5月28日には、午後6時から尾久のデルタ造船所前において、漕艇協会技術部指導のもとに作製した標準型の試作見本艇であった国産カヌー（K-1・K-2・C-1・C-2）の試漕会が行われた。また、この試漕会の前後に、「オリンピック種目であるカヌーを我が國に普及させるにはどうしても國內でドシドシ製造するやうにならなければならぬし、又これ等の舟は『遊び舟』として發展する可能性も十分に備へてゐる。」「初夏の水にはふさわしく輕快そのもので価格も安く一般人の娯樂用として喜ばれよう。」「尚之れで成績が良好ならば各支部へ配布し普及の促進を計る豫定である。」といった内容の記事を、新聞2社が計4回^{23,27,28)}取り上げ、オリンピックへの準備状況を伝えたくてカヌーの普及を促す内容を掲載している。このことから、当時のメディアも我が國におけるカヌーの誕生に興味を示すと共に、一般市民の娯樂となることを期待していたのであろう。

1950年代になると、艇に関する最大艇長、最小艇幅、最小重量の規定が國際的にルール化された¹⁰⁾。その後半世紀にわたり艇の規定は変更されなかったが、1990年代終盤になってヨーロッパを中心に、艇のボトムを細くするために艇の形状に関する研究が行われるようになった。その結果、水と接することがないデッキ部分を太くし、高さを利用することで最小艇幅「51cm以上」という規定条件を形式上満たす艇へと様変わりした。斬新な発想によるデザインの艇が出現したことで、艇に関する國際的な水準はどんどん高くなり、国産の艇は大きく水をあけられることになった。そして2001（H.13）年に、約半世紀の間変わらなかった艇に関する規定において、最小艇幅の条件が撤廃された。それにより、従来とは見違えるほど画期的な細い形状の艇が出現するようになった。それに加え、乗艇する者の体重ごとに適合する艇が開発され、比較的体重が軽いとされる日本人にとって都合のよい製品が誕生した。

(2) 競技場の変遷

我が國最初のボート・カヌー競技場が埼玉県戸田村に建設されることとなり、1937（S.12）年5月の開盤工事に着工以来、工事は主として浦和刑務支所受刑者の勤勞奉仕によって進められた²⁴⁾。受刑者は指揮官を驚かすほどの能率を上げ、ボ-

ートの学生も“もっこかつぎ”の勤勞奉仕をした。翌1938年には、イタリアオリンピック委員会代表プッチョ・プッチ博士が工事中の戸田コースを視察し、「このコースは世界一です。」と折り紙をつけた。そして1940（S.15）年10月27日に、世界一を誇る全長2,500mの戸田コースが竣工した。翌11月1～3日に、明治 宮國民體育大會が全日本選手権を兼ねて開催され、この大会が、戸田競技場での初競争となった¹⁶⁾。このコースは、幻となった東京オリンピックの会場予定地であった。その後実際に開催された東京オリンピックの会場となったのは相模湖で、1947（S.22）年に相模川を堰き止める相模ダムが完成し、1955（S.30）年に相模湖のコース開きが行われた。相模湖は、それ以来カヌーとボートのメッカとなった。この相模湖では、竣工当時にはボートとカヌーが同じ大会の中で競技会を実施していたが、その後区別され、主に全日本学生カヌー選手権を開催するようになった。一方、戸田競技場（漕艇場）では、カヌー競技の中でも全日本選手権大会やアジア選手権大会を中心として1990年代後半まで開催してきた。

現在では、石川県小松市木場潟カヌー競技場と香川県坂出市府中湖カヌー競技場（それぞれ1991年と1993年ともに国体開催地）が日本オリンピック委員会より認定された強化拠点施設となり、国内日本代表選手選考会やオリンピックアジア地区最終予選会などが開催されている²²⁾。さらにこの二つのコースは、2008年（H.20）北京オリンピックに備えた直前合宿地として5ヶ国を数える外国チームにも使用された。

2) 組織の変遷

(1) 国内組織

1936（S.11）年に、日本漕艇協会の役員がベルリンオリンピックを視察した。それを受けて、1940（S.15）年の第12回東京オリンピック大会カヌー競技の開催に向けて、漕艇協会内のオリンピック漕艇部委員会は、1937（S.12）年6月17日の指導委員会において、漕艇の指導部とは独立したカヌー指導部を設置し、オリンピック出場選手の決定、養成、指導にあたることとなった⁴⁾。1938（S.13）年3月18日に、朝日新聞社会議室において評議員会（設立總會）を開催し、日本カヌー協会が設立された^{7,32)}。会長は、専修大学カヌー部

部長道家齊一郎氏が就任した。事務所は、丸ビル(375号室：漕艇・箒球・レスリングと同室)に事務所を設けた。そして協会設立と同時に第12回東京オリンピック大会にむけてのオリンピック組織委員会を立ち上げ、組織強化、広報、選手強化、国内渉外活動、国際機関との連携を図る等の準備に取りかかった⁸⁾。また同年8月5日に、国際カヌー連盟(ICF)に加盟した²⁴⁾。しかし、そのような準備をした1938(S.13)年7月に東京オリンピック大会返上が決定した。各競技団体別の組織委員会も随時解散することとなった²⁴⁾。同様に、日本カヌー協会は漕艇協会を母体として、カヌー組織の立ち上げに努力してきたものの、ついに戦争の影響で活動が十分に出来ず、1942(S.17)年5月29日に日本カヌー協会は解散することとなった。この時期には、1920(T.9)年に設立された日本漕艇協会の人々が、カヌーを組織化し一本立ちをさせてなんとか東京オリンピックでカヌー競技を開催させようとした努力がうかがえる。

当時を知る現日本カヌー連盟会長(代行)である藤田二郎氏によると、「その後カヌーは日本漕艇協会のカヌー部として存続し、木下榮昇・榮徳兄弟の努力によって組織としての余命を保ってきた。」とのことである。これで再び漕艇協会の一部として役員個人による活動を余儀なくされた。大戦終了後の1951(S.26)年9月30日には国際カヌー連盟復帰を認められ、どうにか前途に明るい兆しが見えてきた。しかしこの時点では、国内組織である日本カヌー協会は解散状態にあったはずである。この状況に関して藤田氏によれば、「いずれ開催されるオリンピックに向けて、国際組織(IF)への加盟は必須のため、日本漕艇協会がカヌー部門としてとりあえず登録加盟を行ったのだろう。」とのことであった。また1959(S.34)年には、東京オリンピックでのカヌー競技開催に向けて4人(古市：次期会長、富田・日下・吉川：次期協会理事)が集まり、個人レベルの非公式な会談が持たれた。そして、国際カヌー連盟宛てに、東京オリンピックでのカヌー競技開催に関する嘆願書を送ったという行動記録が、元日本カヌー連盟理事吉川和雄氏が記した資料に残っている。しかし新聞記事によると、1954(S.29)年3月10日に日本カヌー協会は「発会」という形で日本漕艇協会から既に独立をしていた³⁴⁾。この事実を、吉川氏・藤田氏ともに把握されていなかった

たことと、日本漕艇協会がカヌー部門を独立させたかったとうかがえる新聞記事が掲載されていた³³⁾。このことから考察するに、日本カヌー協会の発会は形式だけのもので、組織的なものではなかったように推察される。よって戦中戦後を通して、組織としての活動ではなく、個人の力によって日本カヌー協会の組織がなんとか維持存続されてきたものと言える。この時期に世界が国際組織化を推進する中で、日本が遅れを取ったことは否定できない。

1960(S.35)年6月23日に、永年にわたる日本漕艇協会カヌー部から独立し、日本カヌー協会が再び組織化^{31, 32, 33)}され復活した³⁵⁾。会長には古市六郎氏が就任した。同年、第18回オリンピック大会が東京で開催されることが決定したが、カヌー競技の開催については翌1961(S.36)年の国際オリンピック委員会(IOC)総会での決定を待つこととなった^{3, 5, 29)}。また同年に日本オリンピック委員会に加盟し、日本体育協会にも仮加盟が認められた。翌1962(S.37)年1月には、オリンピックを控えての組織と様々な活動の充実のため、早くも役員の変更が行われ、体育協会公認コーチの選出を行うまでになった。また東京オリンピック前年の1963(S.38)年には、全日本学生カヌー連盟が発足した。大戦後日本カヌー協会が再出発を遂げるまでの15年間は、カヌー競技の目覚ましい普及や発展はあまりなかったが、日本カヌー協会の独立復活をはじめ団体が組織化されたり、東京オリンピック開催のための準備が積極的に行われることによって復興を遂げた時期といえよう。

そして待ちに待った第18回東京オリンピック大会カヌー競技が、1964(S.39)年10月20日より3日間正式種目として開催され³⁶⁾、オリンピックにおけるカヌー競技に日本人が選手として初めて参加した(詳細後述)。その後、1966(S.41)年7月2日に日本体育協会の正式加盟団体に承認された。1970(S.45)年2月には会長が改選されて桜内義雄氏(衆議院議員)が就任し、その後30年以上にわたり日本及びアジア地区のカヌーを牽引し続けた。その10年後の1980(S.55)年3月18日に、日本カヌー協会が社団法人に認可され、名称を「社団法人 日本カヌー連盟」とした。藤田氏によれば、「そこに至るまでには、協会内で度重なる話し合いが持たれ文部省との接渉を重ね、

ようやく法人化の趣意書が受理され許可を得るまでに至った。」とのことである。東京オリンピックが開催され、協会が法人化し連盟へと移行したこの期間は、復興した組織をより強固なものへと確立するために整備された時期と考えられるだろう。

1985 (S.60) 年には、全国高等学校カヌー連盟がたち上げられた。そこでは「手弁当でも」を合言葉に、関係者が一丸となって組織的な活動を目指した¹²⁾。それから17年後の2002 (H.14) 年に、念願だった全国高等学校体育連盟にカヌー競技が正式に加盟したことに伴い、2006 (H.18) 年カヌー競技が全国総合体育大会(インターハイ)種目に加わった。

国内組織の成立過程について、日本カヌー協会が一度解散し独立復活するまでに18年の時を要し、それから法人化するまでにさらに20年かかった。またカヌーが日本体育協会に仮加盟し、国体の正式種目となるまでに21年かかり、高校年代においては全国高等学校カヌー連盟が立ち上がり、全国高体連加盟までの17年を経て全国総体種目になるまでに計21年間かかったことが明らかになった。

(2) 国際組織との関連

国際的には、1924 (T.13) 年に国際カヌー連盟(ICF: International Canoe Federation) が創設され、ドイツに本部を置き、カヌーに関する活動を本格的に行うようになった。1936 (S.11) 年には、ベルリンオリンピックでのカヌー競技が正式種目となり、国際カヌー連盟の飛躍の年となった^{15, 23)}。その後日本カヌー協会も1938 (S.13) 年に国際カヌー連盟に加盟をしたが、大戦による解散を経て1951 (S.26) 年に再加盟を果たした。そして1962 (S.37) 年8月に、ドイツのエッセンで行われた国際カヌー連盟総会において、当時日本カヌー協会理事(米谷庸雄氏) が参加し、トラブルの多いリレー種目に代わり、カヤック4人乗りを正式種目とする案を提案したことにより、ルールが改正された。このことは、国際レベルの会議において日本の発言が認められたことであり、国際組織における存在感を示した出来事であった。

1964 (S.39) 年には、東京オリンピックに先立ち10月17日に産業国際会議場において、国際カヌー連盟の総会(参加者126名) が催され、日本はアジア地域の理事国になった。その責任を果た

すべく、1983 (S.58) 年9月13日に群馬国体のカヌー競技会場である伊香保において、中国、韓国、香港、シンガポール、インドネシアの代表を招いて、「アジアカヌー連盟」を結成し、欠席をしたイラン、朝鮮民主主義人民共和国、ブルネー、マレーシアを加えると10カ国の加盟となった。初代会長には、日本カヌー連盟会長(当時)であった桜内義雄氏が推挙された。今日では、加盟国数26カ国¹⁷⁾にまで増加し成長を遂げた。

現在での日本カヌー連盟と国際組織との関わりは、国際カヌー連盟兼アジアカヌー連盟副会長ならびにレーシング委員会委員(アジアカヌー連盟委員長) に日本人が各1名選出されている。この状況を維持することは、日本のカヌー組織にとって競技力向上をはじめとする様々な場面において大変重要な役割を果たしている。

3) 各種大会・イベントの変遷

(1) 国内における大会

1937 (S.12) 年9月11・12日に、東京市荒川尾久2,000mコースにて行なわれた東京市カヌー協会・専修大学対抗カヌー競争(主催:関東漕艇協会)が、日本国内で最初のカヌーの大会だった^{6, 30, 33)}。この大会は、全日本エイト関東予選の番外競技としての開催であった。同年11月1~3日の日程で開催された第九回明治神宮體育會(主催:明治神宮體育會)に漕艇競技の一種目としてカヌーが加わり、尾久小台橋からの1,000mコースにて大会が行われた。翌1938 (S.13) 年4月29日に、日本カヌー協会創立記念競走會(主催:日本カヌー協会)が東京市北区尾久(第一高等学校艇庫前)の旭電化~小台橋間の1,000mコースにおいて開催された。同年5月28日には、隅田川の帝國大学、東京商船大学の艇庫を中心とする向島コースを会場に、海軍記念日短艇競技大會(主催:東京日日新聞社・海軍協會・海防義會・日本モーターボート協會、賛助:日本漕艇協會・日本カヌー協会)が開催された。実施種目は漕艇のエイト、フォアのシェル艇をはじめカヤック、カナディアン及びファルトボート等を含むカヌーの全種目及びブッサー、モーターボート等で、水上の快速艇を網羅していた。競技組織の枠を越えて大会を開催していたことと、他の競漕大會に例を見ないほどの豪華さは、今では考えられないほどの連携ぶりだと大会の盛大さをうかがい知ることができる。同年に

行なわれたその他の大会では、7月24日に湘南相模川において全日本溪流カヌー競技大会（主催：日本カヌー協会、後援：厚生省・神奈川県）が、9月11日には多摩川丸子橋際において第1回カヌー競技多摩川大会（主催：東京カヌー協会、後援日本カヌー協会、読賣新聞社）が、そして10月8・9日には尾久第一高等學校艇庫前において、第1回全日本學生カヌー選手権競技大会（主催：日本カヌー協会、後援：文部省）が、11月6日には荒川尾久コースを会場に、國民精神作興體育大會（主催：大日本體育協會）が開催された。その後、戦争が激化するまで、毎年のように各競技会が回を重ねていった³¹⁾。

以上のとおり、1937（S.12）年から1938（S.13）年にかけて、主に関東地区ではあるが各種の大会が初めて開催されるようになったが、これらの大会は他の漕艇競技の中でカヌーの試合が行なわれたりカヌーの参加チームが2チームであったりと、まだまだ新しいスポーツ種目としての組織的な活動とはなっておらず、カヌーが芽生え定着を図ろうとした時期であったといえる。この時期には、当時の大会の紹介や報告と成績を発表する記事の掲載がどの大会についても新聞紙面にあることから、他競技との合同開催を通して国民に対しカヌー競技を広報する体制ができていたことが推測できる。しかし第2次世界大戦の激化に伴い、カヌー競技においても活動が思うようにできなくなった。

「戦争が終結した1945（S.20）年11月には、カヌー関係者有志達により、戦災焼失を免れた艇で復活レースを向島で開催した。特に大正・専修の両大学カヌー部は、新艇を購入し選手を養成¹³⁾してカヌー復活の先頭に立った。」と、元日本カヌー協会理事の米谷氏の記述に基づく資料に残っている。その後東京オリンピック開催が決定するまでの間、カヌーとボートの練習を並行して行ったり、ボートの大会において小艇の部として大会が細々と行われていた¹³⁾が、昭和36年に開催された全日本選手権を評して「東京五輪にカヌー種目が加えられ戦後はじめて一本立ちの大会となった。³⁷⁾」という新聞記事あり、組織的に本格的な大会が開催されたのは日本カヌー協会が再出発した戦後16年目のことであった。

国体種目としては、1969（S.44）年の第24回長崎国体にオープン参加し、野母崎町でレーシング

種目を実施して国体参加への第一歩を踏み出した。そして1981（S.56）年3月13日にカヌーが国体競技として承認され、同年の第36回滋賀国体では公開競技となり、翌1982（S.57）年の第37回島根国体から正式競技として参加することとなった¹⁵⁾。日本カヌー連盟が日本体育協会に仮加盟した1961（S.36）年から21年後のことであった。また全国高等学校体育連盟主催の総合体育大会（インターハイ）では、2006（H.18）年にカヌー競技が正式の種目に加わり、大阪府開催ではあったが、山梨県上九一色村精進湖で第1回大会を行った。翌2007年には、他の競技と同様に開催県である佐賀県白石町遊水池公園での大会となった。これにより、戦後の混乱期を乗り越えて、人的・物的・組織的にも復興し整備を成し遂げてきたと考えられる。これらの定着に向けた関係者による努力の結果、他の競技同様に国体やインターハイでの開催を実現することができたのであろう。そしてそれらの成果が次第に国際競技力の面でも現れ始めてきた。

(2) 国際大会での成果

東京オリンピックが開催された2年前の1962（S.37）年にはドイツ、翌年1963（S.38）年にはユーゴスラビアにおける世界選手権に、選手を派遣した。国際大会への選手派遣は、初めてのことであった。同年、東京オリンピックのプレオリンピック大会と位置づけて開催した東京国際スポーツ大会カヌー競技会には、日本選手団として参加した。外国人選手はソ連、西ドイツ、ユーゴスラビア、ルーマニアから国際級の12名を招待し、10月14日から3日間、オリンピックの会場予定地である神奈川県相模湖で盛大に挙行された。これにより、ユーゴスラビアに派遣されなかった選手も、外国の選手と艇を並べる機会を得ることができた。日本の選手は、競技力ではまだまだ海外の選手に及ばないが、運営面ではリハーサルとして自信の持てる大会となった¹³⁾。

1964（S.39）年10月20日より3日間、神奈川県相模湖において、21カ国役員選手213名（女子36名）の参加により第18回オリンピック東京大会カヌー競技を実施した。中原乾二監督、白取義輝コーチ以下14名¹⁴⁾が、世界の強剛に互して健闘したが、決勝への進出はならなかった。競技会運営は、委員長藤木宏清氏以下180名の競技役員

と組織委員会、自衛隊、消防、地元等の直接支援600余名の協力で実施された。東京オリンピック開催にあたり、カヌー競技においても自衛隊体育学校が果たした役割は大きなものがあった。その後大会に留まらずしばらくの間、自衛隊体育学校を中心とした選手育成が、我が国のカヌー競技の確立に大きく影響を与えたと言えよう。

東京オリンピック及び、その前後における国際交流をきっかけに、視野を世界に広げ、1985(S.60)年9月26・27日には、埼玉県戸田漕艇場において第1回アジアカヌー選手権大会を開催した。日本、中国、韓国、香港、シンガポール、インドネシア、マレーシア、イランの8カ国より、選手役員174名が参加して盛大に挙行された。そして1991(H.3)年には、第4回大会開催予定地であったシンガポールの代替え地として急きよ再び日本国内で開催されることとなり、琵琶湖が会場となった。第5回大会は1993(H.5)年に広島で、翌年行われる広島アジア大会のリハーサル大会を兼ねて開催された¹⁸⁾。1994(H.6)年に第12回広島アジア大会が開催され、13の国と地域から411人選手役員が参加した¹⁹⁾。1995(H.7)年7月22～26日、山梨県上九一色村本栖湖においてアジアでは初めての第6回世界ジュニアカヌー選手権大会が開催され、38の国と地域が参加した。この大会では、男子カナディアンフォアが500m種目で5位入賞を果たし、同大会では初めての快挙となった。1993年～1995年は、日本カヌー連盟として3年連続して国際大会を開催し、目覚ましい進展をとげたことになった²⁰⁾。

1993～2003(H.5～15)年には、愛知県三好町において国際レディースカヌー大会が開催された。カヌー強豪国ハンガリーから毎年選手と監督を招聘し、他の国からの参加選手も滞在費を援助し、世界でも例がない女子選手だけの国際大会を10年間にわたり継続して開催した。また2002(H.14)年7月には石川県小松市木場潟において、レーシング種目ワールドカップ最終戦(第5戦)をジュニアの世界大会のリハーサル大会として開催し、翌2003(H.15)年には、第10回世界ジュニアカヌー選手権大会(第6回大会に続き国内開催2回目)が盛大に開催された。この大会で佐藤滋選手(福島県カヌー協会)が、日本カヤックとしては初めてとなる8位入賞の快挙をシングル500mで成し遂げた。この成績について、延べ108

日におよぶ全国を4ブロックに分けての強化及び選手発掘のための合宿や、国際大会への参加経験が好結果につながったと、チームリーダーの坂東美紀氏は分析をしている²¹⁾。

4) オリンピックにおける日本人選手の活躍

1964(S.39)年、東京オリンピックでの初参加以来、連続出場してきたオリンピックにおけるカヌー競技の中で特筆すべき成績としては、1984(S.59)年、ロサンゼルス、カシタス湖で開催された第23回オリンピック大会において、井上清登選手(マルニ特殊家具)がカナディアンシングル500mで6位、同1,000mで8位、また福里修誠(戸田競艇組合)、和泉博幸(日本体育大学)両選手がカナディアンペア500mで8位となり念願のオリンピック初入賞を果たした²³⁾。

1996(H.8)年の第26回アトランタ大会は、肥大化するオリンピックの運営に多くの変革をもたらしたが、カヌー競技においても国際的に新たな規則が設けられ、前年度の世界選手権で各国の出場枠を獲得しなければならない制度が導入された。その予選を勝ち抜き出場を果たした丸山小百合選手(筑波大学)が、女子カヤックシングル500mで、女子ではオリンピック史上初となる準決勝進出を果たすという快挙を成し遂げた。

2004(H.16)年の第28回オリンピックアテネ大会の女子カヤックフォア500mに出場した、北本忍(富山県体育協会)と鈴木裕美子(奈良県体育協会)、竹屋美紀子(山形県立谷地高等学校)、足立美穂(戸田中央総合病院)の選手達が、日本のオリンピック史上女性では初となる決勝進出を果たした。これにより日本のカヌーは世界に向けての躍進を始めることになった¹⁵⁾。そして、2008(H.20)年に行なわれた北京オリンピックでは、女子カヤックペア500mで北本忍・竹屋美紀子選手が5位と、同フォアではその二選手を含む鈴木裕美子(プロティア・ジャパン)と久野綾香(久野製作所)の選手らが6位にそれぞれ入賞を果たし、女子での入賞は初めてのことであり、男女を合わせても過去最高の成績を残した。

今日、日本におけるカヌー競技が徐々に普及し定着するにつれて、オリンピックを指標とする国際競技力も次第に向上してきた。特に1996(H.8)年のアトランタオリンピック以降、出場枠を獲得した国しか参加できないというルールとなり、そ

の厳しい条件の中で前述の成績を残したということは、国内におけるカヌー競技の定着と競技に対する意義の興隆が目覚ましく強化体制が促進された成果といえよう。しかしオリンピック入賞を果たした今、今後さらなる競技力向上を目指すためには、カヌー競技においても新たな特定強化を行なっていかなければならない時期に差し掛かっていると考える。

4. まとめ

我が国のカヌー競技における普及・発展の過程について、分散する史実や資料を基にして整理した結果、その内容的特徴からいくつかのまとまった区分として期分けをすることができた。それら

は、表-1に示すとおり7つの時期に整理することによって、我が国におけるカヌー競技(レーシング)の普及・発展過程を大局的に把握することを可能とする。まずは、日本に競技カヌーの存在すらなかった時期に、既に欧米先進国では国際機関を組織立て、カヌーをオリンピック競技にしようとしていた1935(S.10)年頃までを我が国へのカヌー導入に先立つ【先導期】とする。次に、我が国において幻となった東京オリンピックに向けてカヌーを導入し、手探り状態の中で艇・競技場・選手・役員を準備して短期間のうちに日本カヌー協会を立ち上げた1940(S.15)年頃までを【萌芽期】とする。そして、戦争が激化したことで協会が解散をし、組織の形態をとることなく日本漕

表1 カヌー競技の歴史

期分け	西暦 年号	出来事	オリンピック大会
先導期	1920 T.9	日本漕艇協会 設立	1920 7回 アントワープ
	1924 T.13	国際カヌー連盟創立	1924 8回 パリ
	:	パリオリンピックでデモンストレーション競技として開催	1928 9回 アムステルダム 1932 10回 ロサンゼルス
萌芽期	1936 S.11	カヌー競技がオリンピック正式競技として開催(ベルリン)	1936 11回 ベルリン
	:	漕艇協会役員を派遣・ドイツより艇を持ち帰り・専修大学カヌー部創部	1940 12回 東京中止
	1937 S.12	漕艇協会内にカヌー指導部を設置・艇披露・試乗会・国内初レース	
	1938 S.13	日本カヌー協会設立(12チーム)・東京五輪中止決定・各種大会開催	
混迷期	1940 S.15	国際カヌー連盟加盟・戸田競技場コース竣工	
	1942 S.17	日本カヌー協会解散(木下兄弟努力し存命)	1944 13回 ロンドン中止
	1945 S.20	向島で戦後復活レース開催	1948 14回 ロンドン
	1951 S.26	国際カヌー連盟(ICF)に再加盟	1952 15回 ヘルシンキ
	1954 S.29	日本カヌー協会 発会したが組織化せず	1956 16回 メルボルン
	1955 S.30	相模湖コース開き	
復興期	1959 S.34	役員4名密談 ICFに東京五輪でのカヌー競技開催要望の書簡送付	
	1960 S.35	日本カヌー協会復活	1960 17回 ローマ
	1961 S.36	日本体育協会仮加盟	
	1962 S.37	ドイツに選手、役員を派遣・海外よりコーチ選手招聘	
確立期	1963 S.38	世界選手権大会出場(ユーゴスラビア)・全日本学生連盟発足	
	1964 S.39	東京オリンピックよりリレー種目が4人乗り(K-4)に変更	1964 18回 東京
	:	ICF総会を東京で開催	1968 19回 メキシコ
普及・定着期	1966 S.41	日本体育協会にカヌー競技が正式加盟	1972 20回 ミュンヘン 1976 21回 モントリオール
	1980 S.55	日本カヌー協会が法人化し(社)日本カヌー連盟に改称	1980 22回 モスクワ
	1982 S.57	第37回島根国体よりカヌー競技が正式種目となる	1984 23回 ロサンゼルス
	1983 S.58	アジアカヌー連盟(ACC)設立:10カ国	1988 24回 ソウル
	1984 S.59	ロサンゼルスオリンピックにて初入賞2種目(C-1・C-2)	1992 25回 バルセロナ
	1985 S.60	全国高等学校カヌー連盟設立	
	:	第1回アジアカヌー選手権大会開催(埼玉・戸田漕艇場)	
	1991 H.3	第4回アジアカヌー選手権大会開催(滋賀・琵琶湖)	
	1993 H.5	第5回アジアカヌー選手権大会開催(広島・八千代湖)	
	1994 H.6	第5回広島アジア大会開催(広島・八千代湖)	
1995 H.7	第6回世界ジュニアカヌー選手権大会開催(山梨・本栖湖) C-4が15位入賞		
強化・興隆期	1996 H.8	アトランタオリンピックで女子初めて準決勝進出 五輪予選制度開始	1996 26回 アトランタ
	2001 H.13	艇幅の国際ルールが撤廃 新規格の艇が出現	2000 27回 シドニー
	2002 H.14	全国高等学校体育連盟 加盟・ワールドカップ第5戦開催(石川・木場潟)	2004 28回 アテネ
	2003 H.15	第10回世界ジュニアカヌー選手権大会開催(石川・木場潟) K-1が18位入賞	2008 29回 北京
	2004 H.16	アテネオリンピックにて女子決勝進出初(K-4)	
	2006 H.18	全国総合体育大会正式競技(山梨・精進湖)	
	2007 H.19	全国高等学校総合体育大会を担当で開催(佐賀・白石遊水池)	
	2008 H.20	北京オリンピックにて女子初入賞2種目(K-2・K-4)	

艇協会の一部の個人の努力によってなんとか存命を保ち、戦争終了後の方向性がなかなか見えなかった1959 (S.34) 年頃までを【混迷期】とする。ようやく協会が再建し、活動の基盤が個人から日本カヌー協会組織へと移行した1963 (S.38) 年頃までを【復興期】とする。組織として東京オリンピックに取り組んだことは大きな影響を及ぼし、そこで培ったものを生かし次なる目標である日本カヌー協会を法人化し、国体の正式競技化へ向けて礎を築いた1979 (S.54) 年頃までを【組織確立期】とする。基盤ができたことでさらに底辺の拡大を図ったり、アジアにおいてカヌーの組織作りを進めた1995 (H.7) 年頃までを【普及・定着期】とする。その後、オリンピックの予選制度が導入され、ジュニアからシニアまでの一貫指導が重要視されるようになった。その成果として2008年の北京オリンピックで過去最高の成績を残すまでに成長した今日までを【強化・興隆期】とする。そして今後は、メダル獲得を目指す特別な強化に向けた方策を整備し組織的な取り組みをすることで、我が国カヌー競技の一層の普及と発展を期することができるものとする。

注1) カヌーは、カナダの原住民が木をくり抜いて作った舟が原型といわれ、その型のものをカナディアン (C) ともいう。漕者は立膝の姿勢で片側に水かき (ブレード) の付いたパドルで艇の片側だけをかきながら、同時に方向も操作して進む。日本においては、カナディアンとカヤックを総じてカヌーと言っていることが多い。

注2) カヤック (K) は、北方のイヌイット (エスキモー) が狩をするために作った舟が原型といわれている。漕者は艇の進行方向に向かって座り、パドルの両端にあるブレードで左右交互に水をかきながら艇を進め、舵付きの場合 (レーシング艇等) は足で操作して方向を整える。

注3) フラットウォーターレーシングカヌーは、2008 (H.20) 年11月にローマで開催された国際カヌー連盟の総会において、CANOE SPRINT (カヌースプリント) と名称を変更することが決定された。

<文 献>

- 1) 朝日新聞 1912 (S.12) 年2月7日 朝刊8面
- 2) 朝日新聞 1937 (S.12) 年5月26日 朝刊9面
- 3) 朝日新聞 1937 (S.12) 年5月29日 朝刊8面
- 4) 朝日新聞 1937 (S.12) 年6月19日 朝刊8面
- 5) 朝日新聞 1937 (S.12) 年7月15日 朝刊10面
- 6) 朝日新聞 1937 (S.12) 年9月2日 朝刊8面
- 7) 朝日新聞 1938 (S.13) 年3月19日 朝刊8面
- 8) 朝日新聞 1938 (S.13) 年4月1日 朝刊8面
- 9) 伊東明 (1959) : オリンピック史, 逍遙書院, pp132.
- 10) イステバン・ガラネック著・木下榮昇訳, カヌー漕法 (1977), ベースボールマガジン社, Pp1-4.
- 11) 川本信正 (1963) : オリンピック—そのすべて—, 報知新聞社, pp115-16.
- 12) 全国高等学校体育連盟カヌー専門部機関誌「カヌー」平成14年度, p1.
- 13) 専修大学漕艇部60周年記念誌「専修大学漕艇部60年」.
- 14) 第18回東京オリンピック大会パンフレット.
- 15) 第62回国民体育大会 秋田わか杉国体プログラム (2007), pp96-98.
- 16) 東京外語大学艇友会100周年記念誌「外語ボート100年」, Pp178-81.
- 17) 日本オリンピック委員会ホームページ:<http://www.joc.or.jp/sports/canoe.html>
- 18) 日本カヌー連盟機関誌 (1993.11) : Vol.18, Pp1-15
- 19) 日本カヌー連盟機関誌 (1995.3) : Vol.19, pp6-8.
- 20) 日本カヌー連盟機関誌 (1996.3) : Vol.20, p3
- 21) 日本カヌー連盟機関誌 (2003.12) : Vol.30, pp2-5.
- 22) 日本カヌー連盟機関誌 (2008.1) : Vol.33, pp6-15.
- 23) 日本カヌー連盟ホームページ : http://www.canoe.or.jp/history/history_02.html
- 24) 日本漕艇協会 (1938) : 昭和13年度日本漕艇協會議事録
- 25) 讀賣新聞 1936 (S.11) 年12月19日 朝刊4面
- 26) 讀賣新聞 1937 (S.12) 年2月7日 朝刊4面
- 27) 讀賣新聞 1937 (S.12) 年5月26日 朝刊4面
- 28) 讀賣新聞 1937 (S.12) 年5月29日 朝刊4面
- 29) 讀賣新聞 1937 (S.12) 年6月29日 朝刊4面
- 30) 讀賣新聞 1937 (S.12) 年9月2日 朝刊4面

- 31) 讀賣新聞 1938 (S.13) 年3月29日 朝刊4面
- 32) 讀賣新聞 1938 (S.13) 年3月24日 朝刊4面
- 33) 讀賣新聞 1953 (S.28) 年2月9日 朝刊2面
- 34) 讀賣新聞 1954 (S.29) 年3月11日 朝刊4面
- 35) 讀賣新聞 1960 (S.35) 年6月24日 朝刊7面
- 36) 讀賣新聞 1961 (S.36) 年6月22日 朝刊11面
- 37) 讀賣新聞 1961 (S.36) 年10月30日 朝刊6面

謝辞:本研究の資料収集にあたっては、(社)日本カメラ連盟事務局のご協力のもとになされたものであり、またそれらの資料を記述し残して下さった多くの先人・先輩の方々に心より感謝申し上げます。